

『冷徹上司の、甘い秘密。』

作:青花美来

提供:エブリスタ

<あらすじ>

冷徹と恐れられているイケメンエリート、飛成綾人のもとで働く金山歩は、偶然知った彼が超甘党という秘密を共有することに。それからほどなく、婚約者から手ひどく振られた歩は、飲みすぎて綾人の部屋で解放された結果、一線を越えてしまって……。隠れスイーツ仲間としてのデートや、綾人と親し気な女性をめぐる嫉妬や勘違いを経て結ばれる二人のギャップ×溺愛オフィスラブ。

<キャラクター設定>

■金山歩(かなやま・あゆむ) 主人公。大手食品メーカー、【R.foods】の北海道支社の営業一課に勤める。営業一課内のグループではチーフを務め、飛成の直属の部下にあたる。

年齢:入社 7 年目の 28 歳 髪:ダークブラウンに染めた髪。定期的にパーマで癖毛を誤魔化している。

■飛成綾人(ひなり・あやと) 主人公の上司。入社して営業一課に配属されてからずっと営業成績トップを維持し続け、異例の抜擢で課長に就任したエリート。

年齢:35 歳

身長:すらりとした高身長

髪:綺麗に流した清潔感のある黒髪

瞳:綺麗なアーモンド型の奥二重の目 顔立ち:高い鼻と薄い唇。誰もが羨む端正な顔立ちが放つ営業スマイルも取引先で人気。

■課題原稿■

※青字の部分を原稿としてご提出ください。

仕事が終わった 17 時半。

私は白石ちゃんに捕まる前に急いで会社を飛び出して、とある場所に向かっていた。

今日はずっと楽しみにしていた、期間限定のケーキバイキングが開催される日だった。

事前になんとか予約をゲット。

日付指定されていたため死ぬ気で仕事を終わらせてきた。

ホテルの一階。レストランでスマホでデジタルチケットを提示して案内された会場。席は自

由席。端の二人席にジャケットを置き、早速ケーキの元へ。

今回は 90 分間食べ放題。メインはいちごスイーツとチョコレート。いつもよりランチを少なめにしてお腹は空かせてきた。コンディションはバッチリだ。

キラキラと輝く宝石のようなスイーツの数々に、私の目は輝く。

お皿を持って気になるケーキをたくさん取って、一人で席で頬張る瞬間が、とても幸せだ。昔から甘いものが好きで、学生時代はよく友達とスイーツバイキングに行っていた。

しかし社会人になってからは予定が合わなかったりと中々行けなくて。

相田もケーキにはあまり興味が無いので一緒に行ってくれないことが多い。

優に至ってはそもそも甘い物が苦手だから行きたがらない。

最初は一人で行くのもなあ、と躊躇していた。

現に今も周りはカップルや友達同士で来ている人が殆どだが、ある時"結局食べる時は集中しているのだから一人でも変わらないのではないか?"と思い、それからは特に気になることもなく一人で堂々と食べに行っている。むしろ自分のペースで食べることに集中できるから、一人の方が気が楽だったりもする。

気が付かなかっただけで意外とお一人様が多いのもその理由だ。

今日も私の他にもお一人様が何人かいるようだ。

私はテンポ良く小さなケーキを食べ進め、無くなるたびに新しいケーキを取りに行った。今日何度目かのイチゴタルトのコーナーへ。さっぱりしたいちごと甘いソースとサクサクのタルト生地がとても美味しい。一口サイズだから何個でもいける気がする。

「お、最後の一個だ」

補充される前の最後の一個を取ろうと tong に手を伸ばすと、同じように伸びてきた手が当たって、反射的に手を引っ込めた。

「あっ.....すみませんっ」

「いえ、こちらこそ.....」

聞いたことがあるような低い声に、ふと顔を上げる。

すると。

見慣れたアーモンド型の奥二重が、滅多に見ないメガネの奥から驚いたように私を見つめていた。

「.....えっ!？」

「.....金山っ!？」

「ひ、飛成課長!?何やってるんですかこんなところで」

突然のことに驚いて思わず声が大きくなったことに慌てた課長が、私の口元を手で押さえて端の方に身体ごと追いやられる。

あまりに突然のことでケーキを乗せたお皿のトレイはイチゴタルトのコーナーへ置きっぱなし。

そんなことも気にならないくらい、驚いて固まった。

やっと手を離されたと思ったら、課長は焦ったように周りを見回す。

「お、お前こそ何でこんなところに……」

「何でって……私は毎年来てて今年も予約してずっと楽しみにしてたので……」

「……」

「課長は?……誰の付き添いで来たんですか?」

課長はいつもブラックコーヒーを飲んでいて、甘いものが嫌いだと聞いている。

誰かの差し入れで甘いものがあったとしても、課長は絶対に食べないし課長が何か取引先からもらってきたらそのまま課の冷蔵庫行き。皆課長が食べないのを知っているから誰かが食べてしまう。

そんな飛成課長がスイーツバイキングの会場にいるなんて。

誰かの付き添いとしか考えられない。

しかし課長はなんとも言いにくそうに顔を顰めていて。

それを見て、ピンと閃く。

……まさか恋人がいたのか!

今まで女の影すら無かった課長に、甘い物好きな恋人がいたとは。

何だかちょっと予想外で、笑ってしまった。

「……なんだよ」

「いや、彼女さんがいるなんて聞いたことなかったの。甘い物が好きな方なんですか?」

聞くと、何故か部長は驚いたように目を見開いて。

そしてすぐに大きな溜息を吐いた。

「……課長?」

「お前は本当……はぁ」

「ええ……?」

何故呆れられているのかよくわからない。この数分で課長の見たことのない表情をたくさん見た気がする。

しかし私はここでのんびり会話をしている時間など無くて。この残り 30 分を一秒足りとも無駄にしたいくない。

「大丈夫ですよ。課長に甘い物好きな彼女さんがいるって事は会社の皆には黙っておきますから!じゃあ!私はまだ食べないといけないので!」

失礼します!と勢いよく頭を下げてイチゴタルトコーナーへ戻る。幸いなことにトレイもそのまま置いてあり、イチゴタルトも補充されていた。

「ラッキー!」

どうせ一個取ってもすぐに食べてしまうから、と贅沢に三個も取り、他のケーキも取ってまた席に戻る。

それを口いっぱい頬張りながら幸せな気持ちで飲み込んでいると、私の向かいに人影が落ちて。

「ん.....あれ、かちよー?どうかしました?」

飛成課長が何も言わずに腰掛けた。そしてその手には、同じようにイチゴタルトがたくさん乗ったトレイが。

「.....」

「.....」

「.....」

何故そこにいるのか。わからない。

しかし私の問いに答えることもなく向かいに座っただけで、何も言わない課長。どこかそわそわした様子に、私も戸惑う。

「.....えーっと。.....彼女さんは?」

「.....そんなものはかれこれ何年もいない」

「.....ではご友人と一緒に?」

「.....違う」

「.....」

え?どういうこと?

彼女でもない、友達でもない。.....親?兄妹?いやいや、そんなタイプには見えないし。頭の中で憶測がぐるぐると回る。

そんな私の脳内を見ているかのように、課長はもう一つため息をこぼした。

「.....俺一人で来た」

「.....課長一人で?.....ええっと.....?」

理解が追いつかなくて、課長を見ながら大事に食べていたケーキにグッサリとフォークを刺してしまう。そんな私の手元を見た課長は、私からフォークを奪って粉々に砕けたタルトを生クリームで掬う。

そしてそのフォークを私の口元に持ってきて。

「.....ほら、もったいない。食べ」

甘い香りに条件反射で口を開けるとクリームに付いた砕けたタルト生地が舌の上に乗って。食べさせて貰ったことに気が付いて急に恥ずかしくなったものの、その安定的な美味しさに思わず目尻が下がった。

ゆっくりと味わって飲み込むと、ぎこちなく課長に視線を戻す。

「か、課長は今日はお一人で来たと仰いました?」

「ああ」

「.....甘い物嫌いな課長が?」

「.....ああ」

「ってことは.....え?えーっと、それはつまり。.....実は、甘い物が.....好きだったり?」

「.....」

まさかだった。驚きすぎて何も言えなかった。

バツの悪そうな、どこか恥ずかしそうな初めて見るその表情は、私の問いを肯定しているもので。

え?じゃあ今までの"甘い物嫌いな課長"像は一体.....?

ダメだ、情報量が多すぎて頭がパンクしそう。

「.....とりあえず、時間無くなるんでこれ食べてからでもいいですか」

「.....そうだな。俺も時間無くなる」

「.....」

悩んでいる時間が勿体無い。

お互い無言で取ってきたケーキを食べる。

でも正直味なんてもうわからない。とにかく衝撃的すぎて頭の中を色々なことが駆け巡っている。

そんな状況でも時間まで食べ尽くし、お腹いっぱい状態で出た会場。

その足で数分歩いた先にある同じホテル内のラウンジで向かい合って座る。

注文したレモンティーの氷がカラン、と鳴った。

「.....課長って、もしかして本当は超甘党なんですか？」

甘い物嫌いで通っていた人がものすごい勢いでケーキを食べている姿は違和感でしかなかった。

それを思い出して聞くと、課長の顔がみるみる内に甘く染まって。

「か、課長？」

こんな飛成課長、初めて見た.....!

いつも無表情で冷静沈着なあの課長が!厳しくて怖いで有名なあの課長が!照れてる!

「.....かわいい」

ぼそり。思わず呟いてしまった声に課長の肩がビクッと反応する。

それにまた恥ずかしそうに顔を手で覆った課長。

次々出てくる新鮮すぎる反応に、私は思わず笑ってしまう。

「.....何だよ」

「すみませっ.....ふふっ、普段の課長と違いすぎてっ.....あははっ」

不貞腐れたような表情が、また面白い。

一頻り笑った後、そういえば、と思い出す。

「いつも会社で私ブラック淹れてましたけど、もしかして.....？」

「.....ああ。本当はブラックは苦手だ」

「ぶふっ……」

「笑うな」

「いやだってっ……私何年ブラック淹れてました?言ってくださればカフェオレにでもしたのに」

「この歳でこんな顔で、甘党でコーヒーも飲めないとか引くだろ……」

恥ずかしそうな声は、段々と語尾が小さくなっていく。

それがまた可愛く見えてしまった。

「えー?別に引きませんよ」

「……」

「私も本当はブラックよりココアが好きですし。それに、そもそも私の周りってスイーツ苦手な人が多かったのもそういう話あまり出来なかったんですよ。でもそっかあ……課長がスイーツ好きならこれからいっぱい話せそうで今結構嬉しいです」

ケーキバイキングが何月から始まるとか、どこのケーキ屋さんが美味しいとか。こんなイベントがあるとか。

相田は乗ってくれないし。後輩の白石ちゃん達とはあまりそういう話をしないから。

「そうか……」

「はい」

それから、少しだけ話をして。

本当は私と同じでコーヒーよりココアが好きで。隠れてたまにケーキバイキングやスイーツバイキングに行くのがちょっとした趣味で。毎朝のコーヒーを飲む時の眉間の皺は、苦いのを我慢していたからだなんて。知れば知るほど課長のイメージが良い意味で裏切られたような気がしてちょっと親近感が湧いた。

「頼む。……この事は誰にも言わないでくれ」

この通りだ、と頭を下げる課長。

「別に誰も気にしませんよ?」

むしろ課長のこんな一面を知れば、課長のことを怖がっている社員も減るかもしれないの

に。

「いや俺が気にする」

しかし課長は頑なにそれを拒否する。

「ふはっ、わかりました」

もったいないと思いつつも快諾して。

「その代わり、今度おすすめのスィーツ教えてくださいね」

「.....わかった」

こうして、私と課長のちょっとした秘密が出来たのだった。